9回チラシ出力　05.11.16　11:34　ページ1

空中庭園 Les Jardins Suspendus

第九回公演

クローデルの詩による創作能上演

ポール・クローデル没後50周年記念行事

創作能

薔薇の名

――長谷寺の牡丹――

今立ち上がる　伝統と現代演劇の問題に応える　新しい《音楽・舞踊・詩劇》

禁じられた恋――それを読み解くのは　能　あるいは　深層の舞台

福州鼓山と　こもりくの初瀬――二つの観音寺を繋ぐのは　牡丹の紅　薔薇の記憶

2006年1月15日(日) 14時開演

◎作・構成・演出…渡邊守章／◎節付・作舞…観世榮夫

◎出演

観世銕之丞（福州鼓山湧泉寺の尼僧〔イゼの霊〕／長谷観世音〔牡丹の精〕）

梅若晋矢（若き詩人）

茂山逸平（間・福州鼓山の精＝童子）

地頭……観世榮夫

笛……一噌幸弘

小鼓……大倉源次郎

大鼓……亀井広忠

太鼓……三島 卓

◎場所

宝生能楽堂

〒113-0033 文京区本郷1-5-9

電話 03-3811-4843・ファックス 03-3811-4591

◎スタッフ

作・構成・演出…渡邊守章

節付・作舞 …… 観世榮夫

照明……服部基

演出助手……前川錬一

舞台監督……本城義明

制作……渡邊清子

荻原達子

制作助手……岩崎マチ子

◎主催

空中庭園／『繻子の靴』上演委員会

◎助成

芸術文化振興基金　企業メセナ協議会認定事業

◎後援

駐日フランス大使館・ポール・クローデル没後50周年記念企画委員会

日仏経済交流会（パリ・クラブ）・自由が丘日仏協会・日仏演劇協会

◎料金（全席指定）

S席：8,000円

A席：6,000円

B席：5,000円

学生：3,000円（当日のみ）

◎チケット取り扱い

空中庭園

電話 03-5753-0418・ファックス 03-5753-0419

チケットぴあ

電話 0570-02-9999・9988

0570-02-9966（Pコード 365-833）

◎お問い合わせ

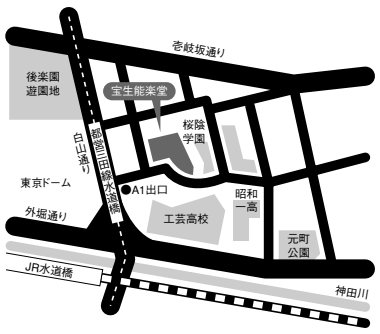
空中庭園

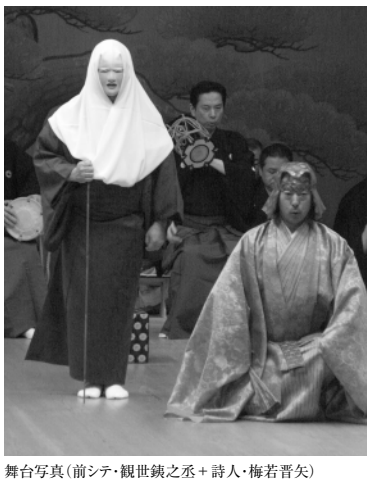
電話 03-5753-0418・ファックス 03-5753-0419

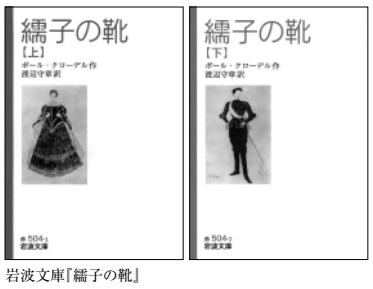
9回チラシ出力　05.11.16　11:34　ページ2

◎全席指定
S席 8,000円／A席 6,000円／B席 5,000円
学生席（当日のみ） 3,000円
◎チケット取扱
空中庭園
電話 03-5753-0418・ファックス 03-5753-0419
チケットぴあ
電話 0570-02-9999・9988
　　0570-02-9966（Pコード 365-833）
◎お問い合わせ
空中庭園　電話 03-5753-0418

◎場所
宝生能楽堂
〒113-0033 文京区本郷1-5-9
電話 03-3811-4843
ファックス 03-3811-4591
http://www.hosho.or.jp
交通
JR［総武線］水道橋駅 東口
都営［三田線］水道橋駅 A1出口
都営バス［池袋駅東口〜一ツ橋］線




舞台写真（前シテ・観世銕之丞＋詩人・梅若晋矢）
撮影：森田貢造

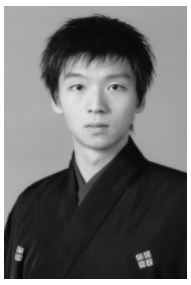


岩波文庫『繻子の靴』
上巻（2005年10月14日刊行　定価本体940円＋税）
下巻（2005年12月15日刊行予定）

観世榮夫

観世銕之丞

梅若晋矢


茂山逸平

一噌幸弘

大倉源次郎

亀井広忠

三島　卓

2005年は、フランスの劇詩人で、大正年間には大使として東京に駐在したポール・クローデルの没後50周年に当たり様々な行事が催されました。空中庭園では2005年3月に、その記念行事の幕開けとして、クローデルの詩による創作能連続上演を行い、『薔薇の名――長谷寺の牡丹』の初演と、『内濠十二景　あるいは《二重の影》』の能楽堂ヴァージョンの上演を行い、幸いにも皆様のご好評を得ました。その間に、クローデルの集大成的戯曲『繻子の靴』の初版全訳が渡邊守章訳・校注で岩波文庫から刊行され、「今年の日本の文学シーンにおける最大の事件」（作家・東大教授松浦寿輝氏の評）として話題となっております。

３月の創作能連続上演の折に再演のご希望の強かった『薔薇の名――長谷寺の牡丹』を、第九回公演として上演いたします。謂わば『繻子の靴』の余白に書き込まれていく詩人の深層の劇を、音楽劇として舞踊劇として、そして詩劇として、舞台上に読み解いていく企てです。日本の伝統演劇と現代における舞台創造の接点を求める実験の一環です。

『薔薇の名――長谷寺の牡丹』は、詩人大使の日本滞在を飾る《毛筆自筆による日本風短詩》である『百扇帖』の中で、最も重要な主題系をなす「長谷寺の牡丹」のシリーズを出発点に、「牡丹」の紅に「薔薇」の記憶を読もうとする謂れを能に仕組んだものです。

1900年から5年間滞在した中国福州で、美しい人妻との不倫の恋を体験した詩人の内心の劇が、福州鼓山の湧泉寺（これも長谷寺と同じく観音寺です）の絶壁の草庵を訪れる日本人の詩人に、尼僧の姿をとって現われた、かつての「禁じられた恋」のイゼの霊によって語られます。イゼは、この事件の破局の後に書いた戯曲『真昼に分かつ』（1906年）のヒロインの名です。この謎めいた名の背後には、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』が透けて見えるだけではなく、アマテラス神話が重ねられており、「イゼの名」は伊勢に所縁の名でもあるというのが、この創作能の作者の解釈です。そして、モデルとなったポーランド系の美しい人妻の名はロザリー、愛称は「ローザ（薔薇）」だったのです。

《薔薇の名》をめぐって、詩人の《真昼時の情念＝受苦》と、老境に入った詩人の《瞑想の眼差し》とが、鼓山湧泉寺と初瀬の観音寺（長谷寺）を繋いで、《禁じられた恋》の意味を問います。